

# ヨエル書とラオデキヤのセブンスデー・アドベンチスト教会 - 第三

## 赤ワインのぶどう畑

Jeff Pippenger

2025-12-03

前回の記事は次の問いで締めくくりました。「これらの概念を踏まえると、9/11のときにヨエル書がペンテコステでペテロが示したメッセージとなったのは、どのようにしてなのでしょう？」

ペテロは、ペンテコステの日にヨエルの預言が成就していることを示していた。これは、ペンテコステ期の終わりを画する時点である。ペンテコステ期には、初めに聖霊の現れがあり、終わりにはさらに大きな聖霊の現れがあった。信仰によって、聖書と証の霊の双方がヨエル書を後の雨の時に適用していると理解するなら、ヨエル書は9/11において現代の真理となったことがわかる。そして、その書のあらゆる要素は、ヨエルが「主の日」と呼ぶ最後の七つの災いを含む、9/11から始まる預言的歴史について直接語ることになる。

1888年に象徴的に示されたように、9月11日には、ラオデキヤ人へのメッセージの提示が現在の試金石の真理となった。イザヤは、58章で、ラッパの声をもって神の民に彼らの背きを示し、同じメッセージを象徴している。イザヤが自分の声をラッパのように響かせ始めるその「日」は、彼が「ぶどう畑の歌」を歌う日と同じである。

その日には、彼女に向かって歌え、「赤ぶどう酒のぶどう園よ」。わたし、主がそれを守る。わたしは絶えずこれに水を注ぐ。だれもそれを害することのないよう、昼も夜も見守る。わたしには怒りはない。いったい誰が、戦いにおいて、いばらやとげをわたしに向かって立てられようか。わたしはそれらを突き進み、まとめて焼き尽くそう。あるいは、彼はわたしの力にすがり、わたしと和睦するがよい。そうすれば、彼はわたしと和睦する。彼はヤコブから出る者たちに根を下ろさせ、イスラエルは花咲き、芽吹き、地の表を実りで満たす。イザヤ書 27:2-6。

現代の霊的イスラエルは、後の雨の期間に「イスラエルは花咲き、芽吹き、世界じゅうを実で満たす」となる。というのも、初めの雨は植物に芽吹きと開花をもたらし、後の雨は実を結ばせるからである。9/11にニューヨークのビル群が崩れ落ちたとき、黙示録18章の力ある御使いが降り、後の雨が降り始めた。その時、神の見張り人たちはラオデキヤの教会に向けてラッパを吹き鳴らすべきであった。神の民の罪を指摘するイザヤのメッセージは、同時に赤ぶどう酒のぶどう畑の歌でもある。ヨエル書1章がまさにそのメッセージである。

ペトエルの子ヨエルに臨んだ主の言葉。

これを聞け、長老たちよ。地のすべての住民よ、耳を傾けよ。これがあなたがたの日に、いや、あなたがたの父祖の日に起こったことがあるか。これをあなたがたの子どもたちに語れ。あなたがたの子どもたちにはその子どもたちに語らせ、その子どもたち

にはさらに次の代に語らせよ。

毛虫が食い残したものは、いなごが食べ、いなごが食い残したものは、尺取虫が食べ、尺取虫が食い残したものは、芋虫が食べた。

酔いどれどもよ、目を覚まして泣け。ぶどう酒を飲む者は皆、新しいぶどう酒のゆえに泣き叫べ。あなたがたの口からそれが断たれたからだ。

ひとつの国民がわたしの地に攻め上ってきた。強く、数えきれない民で、その歯は獅子の歯のよう、また大獅子の臼歯を備えている。彼らはわたしのぶどうの木を荒れ果てさせ、わたしのいちじくの木のを皮をはいだ。すっかり裸にして投げ捨て、その枝は白くなった。若き日の夫のために粗布を腰に締めたおとめのように嘆け。穀物のささげ物と注ぎのささげ物は主の家から絶え、祭司、主に仕える者たちは嘆く。野は荒れ果て、地は嘆き悲しむ。穀物は荒れ果て、新しいぶどう酒は干上がり、油は衰える。

恥じよ、農夫たちよ。泣き叫べ、ぶどう作りの人々よ、小麦と大麦のために。野の収穫が減び去ったからだ。ぶどうの木は枯れ、いちじくの木はしおれ、ざくろの木も、なつめやしの木も、りんごの木も、野のすべての木が枯れた。人の子らから喜びが枯れ去ったからである。

腰に帯を締めて、嘆け、祭司たちよ。祭壇に仕える者たちよ、泣き叫べ。来て、粗布をまとって夜通し伏せよ、わが神に仕える者たちよ。あなたがたの神の家から穀物のささげ物と飲み物のささげ物が取り上げられているからだ。断食を聖別し、厳粛な集会を招集し、長老たちと地のすべての住民をあなたがたの神、主の家に集め、主に叫べ。「ああ、その日よ！主の日が近い。全能者からの破滅のように、それは来る。」私たちの目の前で食物が断たれているではないか。そう、私たちの神の家からは喜びと歓喜も絶えたではないか。種は土塊の下で腐り、穀倉は荒れ果て、倉は崩れ落ちている。穀物が枯れたからだ。獣はなんと唸り声をあげることか。牛の群れは途方に暮れている。牧草がないからだ。まことに、羊の群れも荒廃している。

主よ、私はあなたに叫び求めます。火が荒野の牧草地を食い尽くし、炎が野の木々をすべて焼き尽くしたからです。野の獣もまたあなたに向かって叫び求めます。川の水は涸れ、火が荒野の牧草地を食い尽くしたからです。ヨエル書 1:1-20

ヨエル書の第1章は、神のぶどう園の破壊を扱っている。イザヤは、「その日」を後の雨が始まる日として定めており、その日には植物が花を咲かせ、芽を出し始めるからである。イザヤが、神の民が「根を下ろし」「花咲き芽ぐみ」そして「実」をもって地を満たすと知らせている事実は、三つの段階から成る漸進的な歴史を示している。植物は地中に「根を下ろす」。したがって「根を下ろす」とは、地に立つこと、すなわち地面、あるいは土台を意味する。「ヤコブから出る者」は「根を下ろし」、その後「イスラエル」と呼ばれる。ラオデキヤの経験から出てくる者は、その後フィラデルフィアの者たちと呼ばれるが、その経験を保つには、日曜法で終わる試練の過程において勝利することが求められる。

ヤコブ（「押しのける者」）とイスラエル（「勝利者」）との預言的な関係は、9/11に、土台に立ち返って「根を下ろす」者たちが、その時その場で契約関係に入ることを示している。預言的には、名の変更は契約のしるしであり、アブラムがアブラハムに、サラ

イがサラに、ヤコブがイスラエルに変えられたことなどに表されている。その聖句では、9/11に古い根本的な真理に立ち返った者たちは、雨が花やつぼみを生じさせ始めるとともに、契約関係に入った。日曜法の時には、雨が限りなく注がれるので、全世界は「実」で満たされる。

イザヤはイザヤと一致していなければならず、もちろん他のすべての預言者とも一致していなければならない。しかしイザヤは、ラッパのように声を上げ、ぶどう園の歌という文脈の中で、ラオデキア的なセブンスデー・アドベンチストに彼らの罪を示さなければならない。その歌は、イエスによって、ぶどう園のたとえの中で歌われた。十字架にかかる前、最後にエルサレムを見渡したとき、彼は古代イスラエルが猶予期間の終わりに達し、神の契約の民として退けられつつあることを知っており、そのぶどう園を思って涙を流した。同時にキリストは、神のぶどう園からふさわしい実を結ぶ民と契約を結びつつあった。はじめのヨシュアのぶどう園の物語であれ、終わりのイエスのそれであれ、新しい契約の民となった者たちは、十四万四千人を象徴していた。

キリストはイザヤのぶどう園の預言について語ったが、ホワイト姉妹も同様に語っている。

ぶどう園のたとえは、ユダヤ民族だけに当てはまるのではない。それは私たちにも教訓を与えている。この世代の教会は、神から大いなる特権と祝福を授けられており、神はそれに相応する実りを期待しておられる。『キリストの実物教訓』296ページ。

預言の霊の最後の記述に至る一節を読むことは有益である。

## 第23章 主のぶどう園

### ユダヤ民族

二人の息子のたとえの後に、ぶどう園のたとえが続いた。前者において、キリストはユダヤ人の教師たちに服従の重要性を示した。後者においては、イスラエルに授けられた豊かな祝福を指し示し、それらを通して神が彼らの服従を求めておられることを明らかにした。さらに、彼は彼らが服従によって成就し得たはずの神のご計画の栄光を彼らの前に掲げた。彼は未来の覆いを取り去り、神のご計画を果たさないことによって、国全体がその祝福を失いつつあり、自らに滅びを招きつつあるさまを示した。

キリストは言われた。「ある家の主人がいた。彼はぶどう園を植え、そのまわりに垣を巡らし、その中に搾り場を掘り、やぐらを建て、それを農夫たちに貸して、遠い国へ旅に出た。」

このぶどう園の描写は、預言者イザヤが次のように述べている。「さあ、わが愛する者のために、彼のぶどう園について、わが愛する者の歌を歌おう。わが愛する者は、実り豊かな丘にぶどう園を持っている。彼はその周りに垣をめぐらし、その中の石を取り除き、最良のぶどうの木を植え、その中ほどに塔を建て、さらにその中にぶどうの搾り場を設けた。そして、それがぶどうを実らせることを望んだ。」イザヤ書5:1、2

農夫は荒れ野から一画の土地を選び、そこに柵をめぐらし、雑草や藪を取り払い、耕して、選りすぐりのぶどうの木を植え、豊かな収穫を期待する。耕されていない荒地に比べて優れているこの区画が、彼の世話と労苦の結果を示すことによって彼に名誉をもたらすことを、彼は期待する。同様に神は、キリストによって訓練され教育されるために、世から一つの民を選ばれた。預言者は言う、「万軍の主のぶどう園はイスラエルの家、ユダの人々はその御喜びの植え物である。」イザヤ書 5:7. 神はこの民に大いなる特権を授け、ご自身の豊かな慈しみから彼らを豊かに祝福された。神は、彼らが実を結ぶことによって御名をあげめることを求められた。彼らはその御国の原則を現すべきであった。墮落し邪悪な世のただ中であって、彼らは神の御性質を表すべきであった。

彼らは主のぶどう園として、異教の国々のそれとはまったく異なる実を結ぶべきであった。これらの偶像礼拝の民は、悪事を働くことに身を委ねていた。暴力と犯罪、貪欲、抑圧、そしてこの上なく墮落した行いが、何の抑制もなくほしいままに行われていた。腐敗した木の結ぶ実は、不義、墮落、そして悲惨であった。これとは著しい対照をなすべきなのが、神が植えられたぶどうの木の結ぶ実であった。

ユダヤ民族には、モーセに啓示されたとおりの神の御品性を表すという特権が与えられていた。モーセの「あなたの栄光を私に見せてください」という祈りに応えて、主は「わたしのすべての善をあなたの前に通らせる」と約束された。出エジプト記33:18, 19. 「そして主は彼の前を通り、こう宣言された、『主、主なる神、憐れみ深く恵み深く、怒るのに遅く、慈しみとまことに富み、千の者に慈しみを保ち、不義と背きと罪を赦す。』」出エジプト記34:6, 7. これは神がご自分の民に望まれた実であった。彼らの品性の純潔さにおいて、その生活の聖さにおいて、またその憐れみと慈愛と同情において、彼らは「主の律法は完全で、魂を生き返らせる」ことを示すべきであった。詩篇19:7.

ユダヤ民族を通して、すべての民に豊かな祝福を授けることが神の目的であった。イスラエルを通じて、その御光が全世界に行き渡るための道が備えられるはずであった。世の諸国民は、墮落した慣行に従ったため、神を知る知識を失ってしまっていた。しかし神は、そのあわれみによって、彼らを滅ぼし尽くすことはなさらなかった。神は、ご自身の教会を通して、彼らに神を知る機会を与えることを意図された。神は、ご自身の民を通して啓示された原則が、人間のうちにある神の道徳的なかたちを回復する手段となるよう計画された。

この目的を達成するためにこそ、神は偶像礼拝に染まった親族のもとからアブラハムを呼び出し、カナンの地に住むよう命じられた。「わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとする。あなたは祝福となるであろう。」創世記12章2節。

アブラハムの子孫であるヤコブとその末裔は、強大にして邪悪なあの国民のただ中で神の御国の原則を明らかにするために、エジプトに下らされた。ヨセフの誠実さと、エジプトの民全体のいのちを救った彼の驚くべき働きは、キリストの生涯を表していた。モーセや他の多くの者が、神の証人であった。

主はイスラエルをエジプトから導き出すにあたり、再びその力と憐れみを現された。彼らを奴隷の束縛から救い出し、荒野を旅する間に彼らを取り扱われた主の驚くべきみわざは、彼ら自身の益のためではなかった。それらは周囲の諸国民への教訓とされるためであった。主はご自身を、あらゆる人間の権威と偉大さを超える神として現された。主が御民のために行われたしるしと不思議は、自然に対する主の力、そして自然を礼拝する者たちのうち最も力ある者たちに対する主の力を明らかにした。神は、終わりの日に地を歩き巡られるのと同様に、誇り高ぶるエジプトの地を通り過ぎられた。火と暴風、地震と死をもって、大いなる「わたしはある」方は御自分の民を贖われた。主は彼らを奴隷の地から連れ出された。主は彼らを、「燃える蛇とさそりと渴きのある『大いなる恐ろしい荒野』」を通して導かれた。申命記

8:15. 主は「火打石の岩」から水を湧き出させ、「天の穀物」で彼らを養われた。詩篇 78:24. 「なぜなら」とモーセは言った。「主の分け前はその民、ヤコブはその嗣業の割り当てである。主は彼を荒れ地で、荒れすたれて吠えたける荒野で見だし、彼を導き巡らし、彼に教え、ご自分の目の瞳のように守られた。わしが巢をかき立て、雛の上に舞い、翼を広げてそれらを取り、翼に載せるように、主おひとりが彼を導かれ、彼と共に他の神はなかった。」申命記 32:9-12. このようにして主は彼らをみもとに引き寄せ、彼らがいと高き方の陰に宿る者となるようにされた。

キリストは、荒野をさまようイスラエルの民の導き手であった。昼は雲の柱に、夜は火の柱に覆われて、彼は彼らを導き、道を示した。彼は荒野の危険から彼らを守り、彼らを約束の地へと導き入れ、神を認めないすべての国々の目の前で、イスラエルをご自分の選びの所有、主のぶどう園として定めた。

この民には神の託宣が委ねられた。彼らは、神の律法の戒め—すなわち真理、正義、純潔という永遠の原則—によって囲い守られていた。これらの原則に従うことが彼らの守りとなるはずであった。というのも、それによって罪深い行いによって自らを滅ぼすことから救われるからである。そして、ぶどう園の塔のように、神はその地のただ中にご自分の聖なる神殿を据えられた。

キリストは彼らの教師であった。彼が荒野で彼らと共におられたように、これからも彼らの教師であり導き手であるはずであった。幕屋と神殿において、その栄光は、贖いの座の上にある聖なるシェキナーのうちに宿った。彼らのために、彼はその愛と忍耐の豊かさを絶えず示した。

神はご自分の民イスラエルを、誉れと栄光の民にしようと望まれた。彼らにはあらゆる霊的な特権が与えられた。神は、ご自身を代表する者となるための品性の形成に役立つものを、彼らから何ひとつ差し控えられなかった。

神の律法に従うなら、彼らは世の諸国民の前で驚くほど繁栄するであろう。あらゆる巧みな業において彼らに知恵と技能を授けることのできる方は、引き続き彼らの教師であり、御自分の律法への従順を通して彼らを高貴にし、高めるであろう。もし従順であるなら、彼らは他の国々を苦しめた病から守られ、知性の活力に恵まれるであろう。彼らのすべての繁栄のうちに、神の栄光、その威厳と力が現されるはずであった。彼らは祭司と君侯の王国となるはずであった。神は、彼らが地上で最も偉大な国民となるために必要な一切の条件を備えられた。

キリストはモーセを通して、きわめて明確に神の目的を彼らの前に示し、彼らの繁栄の条件を明らかにされた。「あなたは、あなたの神、主に対して聖なる民である」と主は言われた。「あなたの神、主は、地の全面にいるすべての民のうちで、あなたを、ご自身の特別な民として選ばれた。…… それゆえ知りなさい。あなたの神、主は神、誠実な神であり、主を愛し、その戒めを守る者に、契約といつくしみを千代に至るまで守られる。…… それゆえ、きょう私があなたに命じる戒めと掟と定めを守り行いなさい。もしあなたがこれらの定めに従って耳を傾け、それを守り、行うなら、あなたの神、主は、あなたの父祖に誓われた契約といつくしみを、あなたに守ってくださる。主はあなたを愛し、祝福し、あなたを増やされる。主はまた、あなたの胎の実、あなたの土地の実り、穀物、ぶどう酒、油、あなたの牛の増え、羊の群れを、主があなたの父祖に与えると誓われた地で祝福してくださる。あなたはすべての民よりも祝福される。…… そして主は、あなたからすべての病を取り除き、あなたが知っているエジプトの悪い病を、ひとつもあなたに下されない。」申命記 7:6、9、11-15.

もし彼らが神の戒めを守るなら、神は彼らに最良の麦を与え、岩から蜜をもたらし、長寿をもって彼らを満たし、御救いを彼らに示すと約束された。

神に対する不従順のゆえに、アダムとエバはエデンを失い、罪のために全地は呪われた。しかし、神の民が神の教えに従うなら、彼らの地は肥沃さと美しさを回復するであろう。神ご自身が土地の耕作に関する指示を与え、その回復において彼らは神と協力すべきであった。こうして、神の御支配のもとにある全土は、霊的真理の目に見える事例となるであろう。自然の法則に従って地がその実りを生み出すように、道徳の律法に従って、人々の心は神の御品性の特質を映し出すはずであった。異教徒でさえ、生ける神に仕え礼拝する者たちが優れていることを認めるであろう。

モーセは言った、「見よ。私はあなたがたに、おきてと定めを教えた。私の神、主が私に命じられたとおりにある。あなたがたが、入って所有しようとしている地で、そのように行うためである。だから、それらを守り行いなさい。これこそが、諸国の民の前で、あなたがたの知恵であり悟りである。彼らはこれらすべてのおきてを聞いて、『まことにこの大いなる国民は、知恵があり、悟りのある民だ』と言うだろう。私たちが呼び求めるすべての事において、私たちの神、主が近くおられるのと同じように、神がこれほど近くおられる大いなる国民が、どこにあるだろうか。また、私が今日あなたがたの前に置くこのすべての律法のように、正しいおきてと定めを持つ大いなる国民が、どこにあるだろうか。」申命記 4:5-8.

イスラエルの子らは、神が彼らに定められた全領土を占めるはずであった。まことの神の礼拝と奉仕を退けた諸国民は、その地から追い払われるはずであった。しかし、イスラエルを通してご自身の御品性を啓示することにより、人々をみもとへ引き寄せることこそが神のご目的であった。福音の招きは全世界に与えられるはずであった。犠牲制度の教えを通して、キリストが諸国民の前に高く掲げられ、彼を仰ぎ見る者はみな生きるはずであった。カナン人ラハブやモアブの女ルツのように、偶像礼拝からまことの神の礼拝へと立ち返った者は皆、神の選びの民に加わるはずであった。イスラエルの民が数を増すにつれて、彼らは国境を広げ、ついにはその王国が全世界を包み込むに至るはずであった。

神は、すべての民をその憐れみ深いご支配のもとに置こうと望まれた。神は、この地が喜びと平和で満ちることを望まれた。神は人間を幸いのために創造され、天の平安で人の心を満たすことを切に望んでおられる。神は、地上の家庭が天にある大いなる家族の象徴となることを望んでおられる。

しかし、イスラエルは神の目的を果たさなかった。主は言われた、「わたしはあなたを高貴なぶどうの木、まったく純良な種として植えた。ではどうして、あなたはわたしにとって、見知らぬぶどうの墮落した木に変わってしまったのか。」エレミヤ書 2:21。「イスラエルは空しいぶどうの木、自分のために実を結ぶ。」ホセア書 10:1。「そして今、エルサレムの住民たちよ、ユダの人々よ、どうか、わたしとわたしのぶどう園との間を裁いてくれ。わたしのぶどう園に対して、わたしがその中でしなかったことで、なお何が残っていたというのか。なぜ、わたしがぶどうを実らせることを期待していたのに、野ぶどうを实らせたのか。さあ、わたしがわたしのぶどう園に対して何をしようとしているかを告げよう。わたしはその生け垣を取り除き、食い荒らされるままにし、その垣を打ち壊し、踏みこまれるに任せる。わたしはそれを荒地とし、刈り込むことも掘り起こすこともせず、いばらととげが生えてくるようにする。さらに、雲に命じて、その上に雨を降らせないようにする。なぜなら…主はさばきを求められたが、見よ、暴虐を。義を求められたが、見よ、叫びを。」イザヤ書 5:3-7。

主はモーセを通して、御自分の民に不忠実の結果を示しておられた。彼らとその契約を守ることを拒むなら、神のいのちから自らを断ち切ることになり、神の祝福は彼らに臨まなくなる。『気をつけよ』とモーセは言った。『きょう私があなたがたに命じるその戒めとさばきとおきてを守らないことによって、あなたがたの神、主を忘れることのないように。あなたがたが食べて満ち足り、立派な家を建ててそこに住み、牛の群れや羊の群れが増え、銀や金が増し、あなたがたの持つすべてのものが増し加わる時、あなたがたの心は高ぶり、あなたがたの神、主を忘れてしまう……。そしてあなたがたは心の中で、「私の力、私の手の強さがこの富を得させたのだ」と言う……。もしあなたがたが少しでもあなたがたの神、主を忘れ、ほかの神々に従って歩み、それに仕え、それを拝むなら、私は今日あなたがたに対して証言する。あなたがたは必ず滅びる。主があなたがたの前から滅ぼされる諸国民のように、あなたがたも同じく滅びる。あなたがたの神、主の声に聞き従わなかったからである。』申命記 8:11-14、17、19、20。

その警告はユダヤの民に聞き入れられなかった。彼らは神を忘れ、神の代表としての崇高な特権を見失った。彼らが受けた祝福は世界に祝福をもたらすことがなかった。彼らのあらゆる利点は自己栄化のために利用された。彼らは神が彼らに求めておられた奉仕を神から奪い、また同胞からは宗教的な導きと聖なる模範を奪った。大洪水以前の世界の住民のように、彼らはその悪しき心の思いのままにことごとく行動した。こうして彼らは聖なる事柄を茶番に見せかけ、「主の宮、主の宮、これらは主の宮だ」（エレミヤ書7章4節）と言いながら、同時に神のご性質を歪め、御名を辱め、聖所を汚していた。

主のぶどう園を任されていた農夫たちは、その委託に不忠実であった。祭司や教師たちも、民を忠実に教え導く者ではなかった。彼らは、神の善とあわれみ、そして神が彼らの愛と奉仕を当然求めておられることを、民の前に掲げなかった。これらの農夫

たちは自分の栄光を求め、ぶどう園の実を自分たちのものにしようとした。人々の注意と崇敬を自分たちに引きつけることに心を砕いていた。

イスラエルのこれらの指導者が負っていた罪は、一般の罪人の罪とは異なるものだった。彼らは神に対してきわめて厳粛な義務を負っていた。彼らは「主はこう仰せられる」を教え、実生活において厳格な従順を実行することを誓っていた。ところが彼らはそれを行うどころか、聖書をねじ曲げていた。彼らは生活のあらゆる歩みにまで及ぶ儀式を強要し、人々の上に重い荷を負わせた。人々はラビたちが定めた要求を満たすことができず、絶えず不安のうちに生きていた。人間の作った戒めを守ることが不可能だと分かるにつれ、彼らは神の戒めに対しても無頓着になっていった。

主はご自分の民に、御自分がぶどう園の持ち主であり、彼らの所有物はすべて、主のために用いるべき信託として彼らに与えられているのだと教えておられた。だが祭司や教師たちは、あたかも神の所有物を扱っているかのように、その聖なる職務の働きを果たさなかった。彼らは、御業の前進のために彼らに委ねられていた資源や施設を、組織的に神から奪っていた。彼らのむさぼりと貪欲のゆえに、彼らは異教徒にさえ軽蔑された。こうして、異邦の世界は、神の御性質とその御国の律法を誤って解釈する機会を与えられた。

父の心をもって、神はご自分の民に忍耐を尽くした。与えたり取り去ったりするあわれみによって彼らに訴えかけた。忍耐深く彼らの罪を目の前に示し、寛容をもって彼らがそれを認めるのを待った。神の要求を農夫たちに迫るために預言者や使者が遣わされたが、歓迎されるどころか、敵のように扱われた。農夫たちは彼らを迫害し、殺した。神はさらに別の使者たちを遣わしたが、彼らも最初の者たちと同じ扱いを受けた。ただ、農夫たちの憎しみはいっそう決然としたものになった。

最後の手段として、神は「彼らはわたしの御子を敬うだろう」と言って御子を遣わされた。しかし、彼らの反抗は彼らを復讐心に駆り立て、互いに言い合った。「あれは相続人だ。さあ、彼を殺して、その相続財産を奪い取ろう」。そうすれば、ぶどう園は私たちのものとなり、その実も思いのままにできる。

ユダヤ人の指導者たちは神を愛していなかった。ゆえに彼らは自らを神から切り離し、公正な解決のための神の一切の申し出を退けた。神に愛されたキリストは、ぶどう園の所有者の権利を主張するために来られたが、農夫たちは彼をあからさまに侮り、「この男に私たちを支配させはしない」と言った。彼らはキリストの人格の美しさをねたんだ。彼の教え方は彼らのそれよりはるかに優れており、彼らは彼の成功を恐れた。彼は彼らを諫め、彼らの偽善を暴き、彼らの歩みが必ずもたらす結果を示した。これが彼らを狂気に駆り立てた。彼らは、黙らせることのできない叱責に身を焼かれた。彼らは、キリストが絶えず示した高い義の基準を憎んだ。彼の教えが、自分たちの利己心を覆い隠せなくする立場に彼らを置いていることに気づき、彼を殺す決心をした。彼らは彼の誠実と敬虔の模範、そして彼のすべての行いに表れていた高尚な霊性を憎んだ。彼の生涯全体が彼らの利己心への戒めであった。そして、永遠のいのちに至る従順か、永遠の死に至る不従順かを意味する最後の試練が来たとき、彼らはイスラエルの聖なる方を退けた。彼らがキリストとバラバのどちらを選ぶかを問われたとき、彼らは叫んだ。「バラバを釈放せよ！」ルカ 23:18。ピラトが「それでは、イエスをどうしたらよいのか」と尋ねると、彼らは激しく叫んだ。「十字架につけよ。」マタイ 2

7:22. 「お前たちの王を十字架にしろというのか」とピラトが問うと、祭司や指導者たちから「私たちにはカエサルのほかに王はない」という答えが返ってきた。ヨハネ 19:15. ピラトが「私はこの正しい人の血については無実だ」と言って手を洗うと、祭司たちは無知な群衆とともに激情して「その血の責めは私たちと私たちの子らの上に」と宣言した。マタイ 27:24, 25.

かくして、ユダヤの指導者たちは自らの選択を下した。彼らの決定は、御座に着いておられる方の御手にあるのをヨハネが見た、誰も開くことのできないその書に記録された。ユダ族の獅子によってこの書の封印が解かれるその日には、この決定は、その復讐心を余すところなく示して、彼らの前に現れるだろう。

ユダヤの民は、自分たちは天に寵愛された者であり、神の教会として常に高められるのだという観念を大切にしていた。自分たちはアブラハムの子孫だと彼らは公言し、繁栄の土台は自分たちの目にあまりにも堅固に見えたので、天地に向かって自分たちの権利を奪えるものなら奪ってみよとばかりに挑んだ。だが、彼らは不忠実な生き方によって、天からの裁きと神からの断絶を自ら招いていた。

「ぶどう園のたとえにおいて、キリストは祭司たちの悪の極みとなる行為を彼らの前に描き出したのち、こう問いかけられた。『それでは、ぶどう園の主人が来たとき、その農夫たちをどうするだろうか。』祭司たちはこの語りを深い関心をもって聞いており、このことが自分たちに関わるとは考えもせず、群衆とともにこう答えた。『その悪者どもをひどく滅ぼし、そのぶどう園を、季節ごとに主人に実を納めるほかの農夫たちに貸し与えるでしょう。』」

彼らは知らず知らずのうちに自らの破滅を宣告していた。イエスは彼らを見つめられ、その見透かすようなまなざしのもとで、彼らはイエスが自分たちの心の秘密を読み取っておられることを悟った。その神性は紛れもない力をもって彼らの前にあらわになった。彼らはその農夫たちの中に自分たちの姿を見て、思わず「そんなことがあってはなりません！」と叫んだ。

キリストは厳粛に、嘆きつつ問われた。「あなたがたは、聖書に『家を建てる者たちが捨てた石、それが隅のかしら石となった。これは主のなさったことであり、わたしたちの目には不思議である』と書いてあるのを、読んだことがないのか。だから言っておく。神の国はあなたがたから取り上げられ、その実を結ぶ民に与えられる。また、この石の上に落ちる者は打ち砕かれる。しかし、この石がだれかの上に落ちかかるなら、その者を粉みじんに打ち砕く。」

人々が彼を受け入れていたなら、キリストはユダヤ民族の滅びを免れさせたであろう。だが、ねたみと嫉妬が彼らを頑なにした。彼らは、ナザレのイエスをメシアとして受け入れないことを決意した。彼らは世の光を退け、それ以後、彼らの生涯は真夜中の闇のような暗黒に取り囲まれた。予言されていた滅びがユダヤ民族に臨んだ。抑えの利かない彼ら自身の激情が、彼らの破滅を招いた。盲目的な憤怒の中で、彼らは互いに滅ぼし合った。彼らの反抗的で頑なに誇りは、ローマの征服者たちの怒りを招いた。エルサレムは滅ぼされ、神殿は廢墟とされ、その跡地は畑のように耕された。ユダの子らは最も恐ろしい形の死を遂げた。数百万人が売られ、異教の地で奴隷として仕えることになった。

ユダヤ民族は一つの民として神の目的を果たせず、ぶどう園は彼らから取り上げられた。彼らが乱用した特権と、軽んじた務めは、他の者に委ねられた。

「ぶどう園のたとえば、ユダヤ民族だけに適用されるものではない。それは私たちに  
も教訓を与える。この世代の教会は、神から大いなる特権と祝福を授けられており、  
神はそれに見合う実りを期待しておられる。」『キリストの実物教訓』284-296。

ヨエル書は、世の終わりにおける後の雨の歴史を明らかにしている。後の雨とは、ヨハネの黙示録14章に出てくる第三の天使による、神の最後の警告のメッセージである。後の雨は第三の天使のメッセージを表すが、ゼカリヤの黄金の油、初雨と後の雨、祭壇からの火、その他の表象によって象徴されるように、神と人間との間のコミュニケーションの過程も表している。後の雨は、単にメッセージであり、また神と人との間のコミュニケーションの過程であるだけでなく、神の御言葉によって支えられている唯一の聖別された聖書研究の「方法論」でもある。その方法論とは、イザヤ書28章に見られる「命令に命令、規則に規則、ここにも少し、そこにも少し」である。

古代においても現代においても、その始まりに、『農夫』である神はイスラエルを『荒野』から連れ出した。エジプトでの四百三十年の捕囚であれ、538年から1798年までの暗黒時代における捕囚であれ、イスラエルは『荒野』から連れ出された。というのも、『荒野』は奴隷状態と捕囚の象徴だからである。古代の文字どおりのイスラエルであれ、現代の霊的イスラエルであれ、神は彼らを荒野の捕囚から救い出し、彼らを『ご自身の選びの所有、主のぶどう園』として『立て』、『神の託宣』を代表する特権を『委ねられた』祭司と君侯となるように召された。古代イスラエルにとっての『託宣』は律法であり、現代イスラエルにとっては律法と預言の双方である。

神はこの時代に、古代イスラエルをお召しになったと同様に、ご自分の教会を地上にあって光として立たせるよう召された。真理という力強い大なた、すなわち第一、第二、第三の天使のメッセージによって、神は彼らをご自身の聖なる御もとに引き寄せるために、彼らを諸教会およびこの世から分離された。彼は彼らを御自分の律法の保管者とし、この時のための大いなる預言の真理を彼らに委ねられた。古代イスラエルに委ねられた聖なる神託と同様に、これらは世界に伝えるべき聖なる委託である。黙示録14章の三天使は、神のメッセージの光を受け入れ、地の隅々に至るまで警告を響かせるために神の使者として出て行く人々を表している。『証言』第5巻、455頁。

現代のイスラエルは、聖霊の力のもとで各人の経験においてキリストの品性を現しつつ、後の雨の力のもとで第三天使の大いなる叫びを宣べ伝えるように定められた。第三天使の大いなる叫びは、後の雨が注がれる間に成就するが、それは、バビロンの酒に酔った一群の人々によって偽りの「平和と安全」の後の雨のメッセージが広められている時である。これらは、イザヤのいうエフライムの酔いどれであり、また、口から新しいぶどう酒を断たれたヨエルのいう酒飲みである。真の後の雨のメッセージを受ける者たちは、バビロンの食物を退けて天の糧を選んだダニエル、ミシャエル、ハナニヤ、アザリヤによって表されている。彼らはモーセと小羊の歌、さらにぶどう園の歌を歌う十四万四千人である。というのも、ぶどう園のたとえば、古代イスラエルの契約関係の初めにはモーセの歴史において成就し、またその契約関係の終わりには小羊の歴史において再び成就したからである。

ぶどう園の歌は、主が新しい契約の民と婚姻を結ぶとき、以前の契約の民が差し置かれるという結末で締めくくられる。主は四十年の荒野の放浪で死んだ者たちを素通りし、死ぬべき者たちを離縁しておられたまさにその同じ時に、ヨシュアと契約を結ばれた。主は古代イスラエルを離縁なさると全く同時に、キリスト教会と婚姻を結んでおられた。初め、すなわちアルファの歴史はモーセによって表され、終わり、すなわちオメガは小羊によって表される。彼らがともに表している歴史は、ぶどう園のたとえの歴史である。ゆえに、イザヤのぶどう園の歌は、黙示者ヨハネの「モーセと小羊の歌」である。

これらの考察は次回の記事で続けます。

これらはホワイト姉妹の言葉ではなく、主の言葉であり、その使者があなたがたに伝えるようにと私に託されたものである。神は、あなたがたがもはや彼の御旨と食い違う働きをしないようにと呼びかけておられる。自らをキリスト者と称しながらサタンの特質を現し、霊と言葉と行いにおいて真理の前進を妨げ、確かにサタンが導く道をたどっている人々について、多くの教訓が与えられた。彼らは心のかたくなさのゆえに、本来彼らのものではまったくない、行使してはならない権威を握りしめている。大いなる教師は言われる、「わたしは覆す、覆す、覆す。」バトルクリークでは人々がこう言う、「主の宮、主の宮、私たちは主の宮だ。」しかし彼らは普通の火を用いている。彼らの心は神の恵みによって柔らげられ、従えられてはいない。Manuscript Releases, 第13巻, 222ページ。

神の忍耐には目的がある。だが、あなたがたはそれを挫いている。神は、あなたがたがやがて「取り消してほしい」と切に望むような事態の到来を許しておられる。だが、その時にはもう遅い。神は、残酷で欺きに満ちたハザエルをアラムの王として油注ぐようエリヤに命じられた。それは、偶像礼拝にふけるイスラエルへの鞭となるためであった。

神があなたがたを、その好む欺きに渡してしまわれないと、誰が言えるだろうか。忠実で、確固として、真実な説教者たちこそが、感謝を知らない私たちの諸教会に平和の福音を差し出す最後の者となるかもしれない——それを否定できる者がいるだろうか。破壊者たちはすでにサタンの手の下で訓練され、さらに幾人かの旗手が去って場所を空けるのを待ち、彼らの席を占めるばかりになっており、主が平安を語っておられないのに偽預言者の声で「平安だ、平安だ」と叫ぶのかもしれない。私はめったに泣かない。だが今、涙で目がかすみ、書いているこの紙の上に涙が落ちている。やがて、私たちの間のすべての預言は終わりを迎え、人々を揺り動かしてきた声も、もはや彼らの肉적인眠りを乱すことはないかもしれない。

神が地上でその珍しいみわざをなされるとき、聖なる手がもはや契約の箱を担わなくなるとき、民に災いが臨むであろう。ああ、あなたも、このあなたの日に、あなたの平和に関わる事柄を知っていたなら！ ああ、私たちの民が、ニネベのように、力の限り悔い改め、心を尽くして信じ、神が彼らからその激しい怒りを転じてくださるよう。『証言』第5巻、77。

もし、かたくなな心に身を任せ、誇りと自己義のために自分の過ちを告白しないなら、あなたはサタンの誘惑にさらされたままにされるでしょう。主があなたの誤りを示されるときに悔い改めも告白もしないなら、主の摂理はあなたを同じ道を何度も通らせるでしょう。あなたは同種の過ちを犯すに任され、知恵に欠けたままで、罪を義と

呼び、義を罪と呼ぶようになるでしょう。この終わりの時代にはびこる数多くの欺瞞があなたを取り囲み、あなたは導き手を取り替えてしまいながら、そのことに気づきもしないでしょう。Review and Herald、1890年12月16日。